女學雜誌

第三百二拾二號

甲の巻

明治二十五年七月二日發兌

注意

社説 **立憲帝國政論家** は品川彌二郎を公評し其生首演説を痛撃し立憲時世一狂人を酷斥す **郭公詞** は無名氏が秀麗超逸の筆をもてナイツチルスが天吟を解發し時恰かも郭公來るの節詩情を動かす限りなきの妙味あり **徳川時代平民的理想** は透谷子が長論文の端緒にして **侠と粋** との特性氣禀を解剖し文學上の評眼極て深し **奴の小萬** の評は曩に侠客論を草したる天知子の筆に成る三段分解の批評爽明にして痛快趣味尤多し **其他** 天地管見は例の如く一家哲見を集錄し閑窓の下自修養徳の知己に是非を問はんとを欲し、時事及び寄書ともに尋常ならす切に讀者を待者也

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 322. JULY 2nd. 1892.

EDITORIAL :—Statesmanship in the Constitutional Empire,

LEADING ARTICLES :—"Cuckoo," a Poem by Wordsworth (Anon.); Democratical Ideals under the Tokugawa Regimé (No. I.) by Tōkoku.

NOVEL :—"Hoshiyo"

CRITICAL NOTES :—"Yakko-no-Kōman" (Tenchi); "Illustrated Description of the Battle of Sekigahara"; Miscellanies of of Mr. Kurimoto.

MISCELLANIES :—Complaint of a Country Gentleman; Literary Curiousity; Bird-eye View of the Costmos (No. III).

TOPICS OF THE DAY.

本號（第三百廿二號）目次

●社說　立憲帝國政論家

●論說　德川時代の平民的理想（透谷）○郭公詞（無名氏）

●小說　星夜（脫蟬子）

●批評　奴の小万（天知子）○關原合戰圖志○匏庵十種

●雜錄　田舍歎（方寸子）○閑文字（若中の樂、等阿法師法語、譯詩）禿木子○天地管見（良心に恥ぢず、名譽に掛念せず、智及德）六合學人○

●時事　朝鮮問題○新聞紙上外交論○司法大臣○鐵道會議○國民協會○教育者を教訓せざる可らず○

●寄書　按摩術を以て盲者特有の業となすの議（中川恭次郞）○當時の文學界を見て（悠々庵主人）○青年の責任（蘇溪生）

●片々

前週（第三百廿一號）赤表

●論說　十九世紀の勳爵士

●批評　「奴の小万」を讀む（是空子）

●兒藍　吾宿の花（若松しづ子）

●小說　痣番人（上）ひさご

●史傳　コロムバス夫人○園女

●拔萃　女學生の月經○當世辨士演說速變概覽○三島通良氏の學校兒童の衞生○教育時論の女子の風儀

●家政　ホーム建設心得○コロムビヤ家政會の報告

●雜錄　遺ひ物の情○男と女との相違の詩

●文藝　阿佛尼詠詞十八首

●寄書　遺ひ物新發明○取次に主人○改良衣に就ての懇願

●問答　ユーカリ樹○女學生の精神と氣風○迎春行

●女報

前々週（第三百廿一號）白表

●社說　人生大時機○慣習一新小策

●論說　東花坊、我を刺激す（天知子）○ジョージ、エリオットが小說中の女主人公（無名氏）

●小說　人さまぐ（第一、文學者のホーム　若松しづ子）○紅樓夢の一節（風月寶鑑の辭）無名氏。

●批評　巢林子が歎念佛を讀みて（透谷）

●雜錄　天地管見（倫理神理の講究。兒に對する愛。事業成否鑑識の法）

●時事　副島伯○同胞の出稼人○時事片々

●寄書　青年何ぞ老ゆるとの早き（文醜眞逸）○前赤壁賦の和譯（立花寬篤）

●附錄　教育學講義（教育とは何ぞや）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百廿二號　明治二十五年七月二日發兌

社説

立憲帝國政論家

物撰擧の取締は、内閣特に品川前内務大臣に全委したり、是れ天下公衆の明らかに認知したる所ろなり。總撰擧に際し、陸軍省に屬する憲兵、農商務省に屬する林務官等が處置は稍や公平を得たるに、獨り時の内務大臣品川子に隷屬する官吏等が處置の奇怪至極なりしことは天下公衆の亦均しく明知明認する所ろ也。此を以て、撰擧干渉を非難するの聲四方に反響したり、生平所謂る民黨なるものに一々加擔せざる重厚温雅の君子も、今や則はち斷じて許す可らずと絶叫したり。反響と絶叫と其聲いよ〳〵揚り遂に第三期帝國議會劈頭第一の問題は、先づ此暴政の處置を決せざる可らずと云へる輿論を堅定したり。此に於てか、品川子内務大臣を辭して樞密院内に隱れ、烈潔任俠の老國士副島種臣伯之に代りぬ。傳ふらく、伯は、此の解散後の議會を一と先づ平和に經過せしめ、而して后ち知事警部長の大更迭を斷行せんとを目的とし、且つ民官破裂の隙を邦家十年の爲に可成く彌縫せんとを期圖せられたりと、左れど、此も亦た空しくなれるぞ、今は殘念なる。第三期帝國議會開けたり、初一旬未だ終らざるに先だち、五月十四日、中村彌六君緊急動議を提起す、滿場早く激昂し、贊否の大勢既に定まれり。松方總理大臣は、斯の如き茫々汎々たる事實と云へり。然れども此事實は、百十一に對する百五十四の大多數、即はち衆議院議員の過半數を以て確認し、實に左の如く議決したり、

本年二月衆議院議員總撰擧に際し官吏が其職權を濫用して撰擧權を侵犯したるは其證跡明確にして全國人民の具瞻する所區々の辨疏を以て之を蔽ふ可きに非ず本院は認めて以て事實と爲す内閣大臣は宜しく反省して其責に任じ自ら處決する所なかる可らず否らざれば立憲制度の大綱を失墜せん茲に之を決議す

此に至りては、立憲帝政國の内閣大臣たる者、實に皆な反省して其過を覺り、以て自から處決する所ろあらざる可らず。此に至りては、全内閣員の連帶責任たるべし、苟くも相譲り

て責を他に嫁す可らざる也。然れども、特に多く此の感なかる可からざるは即はち品川前内務大臣とす。彼れにして、若し立憲國大臣たるの氣宇と、眞個に偉男子たるの胸量と、堂々たる義俠男子の骨腸とを有てりとせば當に其の職辭を此の決議あるの日迄で引延し、此決議あると共に潔然冠を奉還して責を一身に引かんとを欲すべき也。然るに彼が胸中は、此の寛忍大量の規模を容るゝの余地なかりき。而して、彼は愛國者らしき言動を以て社會公論の上下に出沒し、或る時は實に左の如き歌を歌へりと云ふ、

事問はん日比谷の原に鳴く蛙
君の爲にか己が爲にか

吾黨は、吉田松陰を以て政事家と爲すものにあらず、弟子は師に勝らず、誰れか品川彌二郎子を以て政事家の資格ありと鑑定するものあらんや。其の農務に於ける處置、其の共同運輸會社に於ける處置等を擧て之を評するは、喩へば白骨を土中に堀りて之を鞭うつが如し。吾黨は忍びず。其の撰擧干涉に於ける處置、其の震災地救助に於ける處置の如きは、立憲政事家たるの資格に於て是非何如ん、吾黨は之を蔽はんとするも世人が記臆尙ほ鮮新なるを何とかせん。而して彼は一點改悟する所ろなき也。尙且つ得意放歌して、日本帝國の代議士を蛙に比べたり。輕語責なき新聞記者の口よりすと云はゞ吾黨は之を恕せん、トコトンヤレを歌ふ維新前の壯士之を歌ふとせば吾黨は之を恕せん、苟くも言動一世の共有物たるべき立憲帝國の政事家之を言ふとせば、俯仰慨歎の念に禁ずると能はず。品川彌二郎子は政事家に非る也。もし强ひて之を求めば、やゝ氣骨ある政論家なりと謂つべし。

品川彌二郎子は政論家なるか。吾黨は少なからぬ念を掛けて其言動に注意したり。夫れ後藤伯は風の如し其吹く時は、塵と香とを混同す、後藤伯流行の時節は、政事界の良心昏亂せる時節なり。品川子は錐の如し、其刺す時は、人をして狂苦せしむ、憲法、自由及び、公明寛忍なる手段を放擲せしむ、品川子慷慨の時節は、狂亂激痛の時節なり。後藤伯は策士に好かれ、品川子は壯士に好かる。後藤伯に立憲大臣の經綸なし、多くは戰國策のポリシーなり、品川子に立憲政論家の學論なし、多くは慷慨悲歌の破壞論なり。其の東洋非文明の風に染まれるに至ては一也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

品川彌二郎子は政論家なるか。吾黨は此の政論家が、去廿日、國民協會發會式の席上に於ける演說筆記を讀む。彼は當時例の如く慷慨したりと云へり、而して其言語に云く、

顧れば三十餘年前余の十八九歲の頃なりし伏見寺田屋に於て故南洲翁三十餘名の壯士を率ひて爲す所あらんとし遂に血を流したることありしが國事の爲に余が血を見たるとは此時を初となす……若し西鄉伯にして薩長等の一部分を利せんとするが如きことあらば余は西鄉伯の頭を斬て諸君に示さん、若し万一余にして爾ることあらんか予は西鄉伯の爲に首となつて諸君に見えんのみ、而して若し二人協同し國家の不利を企だてば、乞ふ滿堂の諸君余等二人をして身首處を異にせしめられんことをと。

嗚呼是れ立憲國に於ける狂人の言語に非ずや。彼は、首を切り首を切らるゝことを以て男子らしきことと思ふ如し。恐らくは之を以て勇氣あることと思ふならん。上み天皇あり、下も大審院あり、帝國に憲法あり、人民に議會あるの日、野蠻人の處行を壯とし、無政府の時代を高しとするもの果して立憲帝國に於ける良民なる乎。

奇怪なるは、同時席上に列坐したる六十餘名の代議士なり。立憲帝國の代議士は、此演說を聞き、一人にても憤慨したりや。憲法を無みし、自由を無みし、言論を無みし、而して、維新前伏見寺田屋に於ける流血を理想として、今后同様の流血をもて國家に報ひんことを欲すと盟ひたる一狂人の暴論を聞き、帝國良民の代議士たる諸君は一言にても其過を正したる乎。曰く否な。諸君は啻に之を正さゞるのみならず、滿堂森然として敬服し、諸君中の惣代として、代議士の一人たる大岡育造氏を以て謝辭を述べしめ、而も此の奇怪なる席上に於て、立憲帝國皇帝の万歲を三唱したりと云へり。嗚呼、諸君。諸君は邦家の前途を何如んせんとする。

吾黨は此に至り、品川彌二郎子は、政論家にだもあらざることを認知したり。彼れ或は維新前の壯士たることを得ん、明治現今の良民たる可らざる也、況んや政論家をや。或人は謂はん此は是れ、演說の句調、語法の流勢然らしめたるもの、と。吾黨は黃口書生の言論に於て時として之を恕せん、苟くも、身一と度び內務大臣たり、現に最高政府の樞密院にある子爵品川彌二郎君が演說として、毫も寬假すること能はざる也。夫

三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

れ一句一言の抑揚によりて人心を昂め且つ沈むるは、立憲國政論家の任なり。然るに其堂々として告白する所ろ此の如し、其議論の調勢不識奔逸せるものに非す、其の立論の結構整然として唯だ此の一事を述べたるに止まれり。彼は實に眞面目に生首を説きたる也、彼は初めより生首を理想したる也。嗚呼、彼は血を流すことを畏れとせり。

吾黨は此に至りて、總撰擧に際する惡逆無道の出處を推認することを得たり。劍を提げて良民を斬り、火を放つて家を燒き、未決監の囚徒を放つて强迫せしめ、提捕狀を發して妄りに囚牢したるが如き事件、凡そ第三期議會の議塲に於ける五六代議士が明白に暴露せる事實は、確かに其出處あることを明白に證明したり。

今后民黨と國民派との競爭いよ〳〵激烈とならん時、所云る生首主義に類似する行爲を以て誇るが如きもの出で來らんには、吾黨は亦た其出處を此處に推因せざるを得ず。

夫れ吾黨は必しも所云る民黨に一々賛成するものにあらず、何んぞ必ずしも國民協會なるものゝ設立に反對せんや。此會は極めて難はしき名を冠りて出現したり、幸にして、其名稱に稱ひ、時としては過激に走り勝の敵黨を扣へて、之を和らむることを得ば、一助なきにあらず。然れども、若し不幸にして、彼の品川彌二郎子の如き人物（吾黨は其人物を憫れむ、故に謂はん彼の狂暴を爲すが如き人物と）を以て其領袖と爲さん間は、痛むべし、國民協會は、遂に立憲帝政の益となるものにあらずと、斷言せざる可らず。

深く品川彌二郎君其人の爲に惜しむ。吾黨は君が愛國の念あることを疑はず、亦君が帝室に忠ならんとするの情あることを疑はず、亦君が邦家今日の景况に慷慨するの胸中を疑はず、亦君が微力を奮ひ敢て避けずして之に當らんとするの勇あることを疑はず。但だ悲しひ哉、君は寛忍の量と、大觀の識と、文明國政治家の良心とを欠けり。之によりて、屢ば慷慨して屢ば誤まり、志功幾度びか顚蹶して、彌よ君が多病を增す。吾黨此の老壯士を懷ふ毎に、暗涙の下るを覺ゆ。

思ふに其責亦た新聞紙及び輿論にあり。凡そ立憲國の政治家を論ずるに當りては、當に之を公有物として論ずへし、之を一私人として是非す可らざるなり。此故に、たとひ其心術の憫れむべく、其精神のやゝ取るべきものあるも、一と度び其

處置にして公明正大の跡を欠くとあらば當に之を公罰して毫も假す所ろなかるべし。之を假すは則はち一私人たるの德に於てす、之を公德の上に於て容赦す可らざる也。然るに、撰擧干涉の末、彼れ品川前內務大臣が、其職を辭するに際しては、一私人たる彌次郎君が心術と、內務大臣たり、立憲政治家たる公德とを混一し、其多少の圭角が碌々平凡の人の間に燦めくと、其慷慨悲歌が昏睡濛々の內に耳立つとに迷はされ、之を公責せずして、寧ろ之を私贊し、分もなき一小文人の戲に似たる歌を傳唱して切りに賞立たるともありき。是れ實に日本の新聞紙と、日本の輿論とが、文明的に進化せずして、尙ほ戰國時代の臭氣を存する常例の一證たり。品川彌二郎君は、斯の如き批評を見、心中少しく得意の狀あり、其の恬然として再たび政治社界の舞台に現はれ、干涉決議の成り行未だ畢らざるに當りて、早くも政治家たるの演說を試みんとするに至りたるは、實に輿論の制裁の緩漫なるによる也。

且や、大勇なき人は矯激の言語を喜び、沈痛酷熱の情なき人は慷慨の辭をば壯んなりとするもの也。近來、世上未だ立憲文明國の勇氣なるものを味はず、依然として昔時の蠻風を以て勇ましと爲せり。此に於てか、少しく慷慨悲憤の聲を放てば、乍まち揚賞し、贊して至誠と云へり。如此き人民は、ワシントンが色を靑くして議場より奔りたる由緣を知らず、平重盛が晝夜苦吟し早惶として人を招くの衷情を知らざる也。板垣伯つねに少年客氣の徒を戒めて曰く、戰爭の時には弱き奴先づ激烈の言語を發すと。方今帝職の鍾馗の如き勇士諸君、よく此般の消息を知るや。

故に云く、生首演說の類を聞て感服するは、其心未だ開けずして依然蠻習を存するの故か、もしくは膽裏沈勇なく、口頭眉端にたゞ浮薄飄々たる僞精神の蒸發したるに由る。

以上の論文を讀みて怒るものあるべし。其人はステッキを揮ふか、刀を拔いて起草者を切らんことを欲する類の人なるべし、而して其人は血を見んことを希ふ所ろの人なるべし。然れども起草者は血によりて生くる人にあらず、血を失ふとも死せず、何んぞ之を流して生命を滅ずるものならんや。其軀を縛して牢獄の裏に投ずとも、其心は如何なる人間にも縛せられざるものなり。言論は此の靈心より發す、文章は此の言論を寫す。言論文章は則ち自由保護第一の武器なり。之を以て戰はんとする者あらば、何人にもお相手すべし。

論説

幕府時代の平民的理想（第一）

透谷子

焉馬、三馬、源内、一九等の著書を讀む時にわれは必らず彼等の中に潜める一種の平民的虚無思想の絃に觸るゝ思あり。就中一九の著書膝栗毛に對してしかく感ずるなり。戯文戯墨の毒弊は世俗の衆盲を顛墮せしのみかは作者自身等をも顛墮し去んぬ。然れども其罪は之を獨り作者に歸すべきにあらず當時の時代豈作者の筆頭を借りて其陋醜を遺存せしものにあらずとせんや。

徳川氏の封建制度は世界に於て完全なるもの〻一と稱せらる、然れども武門の榮華は平民に取りて幸福を剝脱する秋霜なり、盆水一方に高ければ他方に低からざるを得ず、權力の積壘せし武門に自からなる腐爛生じ、而して平民社界も亦た敗壞し終れり、一方は盛榮の餘に廢れ他方は失望の極に陷落せしなり、自然の結果ほど恐るべきものはあらじ。道德の府なる儒學も平民の門を叩くことは稀なりし、高等民種の中にすら局促たる繩墨の覊絆を脱するに足るべき活氣ある儒學に入ることを許さゞりしなり。精神的修養の道一として平民を崇むるに適するものあらず、偶俳道の普及は以て彼等を死地に救濟せんとしけるも彼等は自ら其粹美を蹴棄したり。

禪味飄逸なる佛教は屈曲して彼等の內に入れり彼等は神道家の如くに皇室を敬崇することを得ず孔教を奉じて德性を育助することも能はず、左ればとて幽玄なる佛界の菩薩に近づく事も彼等の爲し得るところにあらず、悲しいかな佛教の中にも卑近なる教派のみ彼等の友となり、迷信は彼等を禁籠する囚牢となり、弱志弱意は彼等を枯死せしむる荒野となり、彼等をして人間の靈性を放擲して自ら甘んじて眼前の權勢に屈從せしむるに至りぬ。

自由は人間天賦の靈性の一なり。極めて自然なる願欲の一なり。然るに彼等は呱々の聲の中より既にこの靈性を喪へるを自識せざる可らざる運命に抱かれてありたり、自然なる願欲は抑へて不自然なる屈從を學ばざる可からざるタイムの籠に投げられてありたり。人誰れか全くタイムの籠に控博せら

るゝを心地よしとするものあらむ、人誰れか天賦の靈性を自殺せしむべき運命を幸福なりとするものあらむ。沙翁人間に斯般の一種の煩悶の拔く可からざるものあるを見て通解して謂へらく

For Who Would Bear the Whips and scorns of time
The Oppressor Wrong, the Proud man's contemnely Etc.

まことに人間は自由を享有すべき者なるよ。今日までの歴史を細閲すれば自由を買はんとて流せし血の價と煩悶せし苦痛の量とはいかばかりぞや。

Thus the native hue of resolution is snilled
over the pale cast of thought Etc

徳川氏末世の平民實にこの煩悶を有つこと少なからざりしなり、この煩悶の苦痛に堪へがたかりしなり、こゝに於てか權勢家の剛愎にして暴慢なる制抑を離れて別に一種の思想境を造り以て自ら縱にするところなきを得ず。この思想境は余が所謂一種の平民的虛無思想の聚成したるところなり。而して十返舍一流の戯謔は實にこの種の思想境より外に鳴り出でたる平民者流の自然の聲にあらずして何ぞや。

民友子先つ頃俗間の歌謠と題する一文を作りて平民社界に行はるゝ音樂の調子の低くして險なるを說きぬ。民友子は時勢を洞察して歎慨の餘りに此語を吐けり、われは日本の文學史に對してこの一種の虛無思想の領地の廣きを見て痛惻に勝へざるなり、彼等は高妙なる趣致ある道德を其門に辭み、韻調の整嚴なる管絃を謝して容れず卑野なる樂調を以て飲宴の興を補ひ放縱なる諧謔を以て人生を醜殺す。三絃の流行は彼等の中に證をなせり、義太夫常盤津より以下短歌長歌ことごとく立ちて之れが見證者たるなるべし。われは彼等の無政府主義なりしや極端なる共和主義なりしや否やを知らず、然れども政治上に於て無政府主義ならずとも共和主義ならずとも思想上に於ては彼等は純然たる虛無思想を胎生したりしことを疑はず、あはれむべし人生の靈存を頭より尾まで茶にしてかゝりたる十返舍も一個の傲骨男兒なりしにあらずや、靑山を抱いて自由の氣を賦せしシルレルと我好傲骨男子と其搖籃の中にありし時の距離何ぞや。

女學子は時勢に激するところありて膝栗毛の板を火かんと言り。われは女學子の社界改良の熱情に一方ならぬ同情を有ものなり、然れどもわれは寧ろ十返舍の爲に泣かざるを得ざる悲痛あり、彼の如き豪逸なる資情を以て、彼の如きゼヌインの

ウイットを以て而して彼の如くに無無無の陋巷に迷ひ、無無無の奇語を吐き無無無の文字を弄して遂に無無無の代表者となつて終らしめたるもの抑も時代の罪にあらずして何ぞや。

(本論は次號にうつりて我が畏敬する天知子と愛山生の兩兄によりて評論界を騒がしたる「遊俠」の問題に入り更に「粹」といふ題目に進みて卑見を吐露すべし)

郭公詞

無名氏

西暦千七百八十年のころ「ライダル」の山頭に門を鎖して吟詠に絶代の風雅を發し、英國の詩壇これよりその風潮を變じたるは詩隱ウイルヤム、ウオルヅオースの力なりとす。蓋しポープの富麗纎巧をもて騒人の眼を奪ひしよりこのかた詞藻ひたすら派手の方にのみ流れ、加ふるに太平の餘澤に浴して人心多くきらびやかなる傾向を生ぜしかば、盲目の詩仙がその國のために殘し置ける樂園の名殘も顧るものさへ少なき迄にいたりしなり。このときにわたりてウオルヅオースは「カンバーランド」の江山にその幽玄なる詩眼をやしなひ、そゞろにその意の新しきを吐きけるに世人はいまだ其詩趣を味ふことを知らざりき。

もしウオルヅオースをして其器よく容るゝところなからしめば、當世の人がおのれの詩を聽くものなきを見て天下の判者を嘲りしなるべし。然れどもウオルヅオースは世人の毀譽にその心を動さず、反て後生の一指を恐れしの人なり。

ウオルヅオースの詩を作りしや、すでに壯年のころよりいたく世の人に立ち勝れその才分の一世を蓋ふに足りしを見るべし。十八歳にして「カンブリツヂ」に入りしが、「晩歩」の詞のごときは其頃の作なりしと聞ゆ。蓋しウオルヅオースは自信の念はなはだ深かりしが故に、四五十年の間よく世の盲目なる非難に堪へ、敢て節を屈げて時文の浮華なるに諛らず、伏鸞のごとく又隱鵠のごとくおのづから是れ風塵の外にありて詩林のあなたに逍遙せしなり。世人漸くウオルヅオースあるを知るにいたりしは渠が晩年の頃にして、これより騒壇の潮波一變しまたポープを口にするものなく、「ライダル」の隱者遂に英國

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の詩冠を載くにいたりぬ。

ウオルヅオースは幽峭飄逸にしていたく唐土の青蓮に似たり。その節を守ることの固くして神姿高遠なるは今の世の風雅に志あるものが師表となすに足りぬべし。その作數百篇の多きにいたるといへども短詩にして誦すべきもの酷だ多く、アーノルドをして「命之評」の嘆を出さしめしもの今更の如くいはんも烏滸なり。こゝに註するはすなはち短詩のうちのひとつなりとす。

To the Cuckoo.

O blithe new-Comer! I have heard!
I hear thee and rejoice.
O Cuckoo! shall I call thee bird,
Or but a wandering voice?

ウオルヅオースの吟はこと〳〵く自然に出でゝかの飄然として來り忽然として去るといふ趣を供へたり。されば、言葉やさしく言放ちたる偶然の作と覺しきものに幽玄なる妙味を有しこれを誦することいよ〳〵久ふしていよ〳〵その詩趣の寂たるを聽くべし。

こゝに出したる郭公の詞は想像の篇のうちに出でたり。先づこの詞初四句の意は、うつくしき新客を迎ふるのよろこびを述べ、かへてその鳴音を聽けりといひ、今これを聽くといひまたこれをよろこぶといひ、郭公を指して鳥と呼ばむか、あるひは一流聲といはむかといひて、その高天に出沒し聲を惜み影を見せざるの妙を吟じ出でたるなり。

While I am lying on the grass
Thy twofold shout I hear,
From hill to hill it seems to pass,
At once far off and near.

この四句の意は青々としたる草のうへに横はりてその新聲に耳そばだつるに、あだかも山より山にうつるがごとく、さも遠しと身を延せば反て耳の邊に聞ゆる趣を吟じ出でたり。かの足引の山郭公こがくれてと讀みけるは、まさにその風興を同ふしたるものなるべし。

Though babbling only, to the vale,
Of sunshine and of flowers,
Thou bringest unto me a tale
Of visionary hours.

前の八句はおもに杜鵑の初音をゆかしとせるさまを記せるなり。この四句にいたりては一歩を進めておのれが幻想の本色を書き來り、讀むものをして覺えずその幽玄なる詩想のうちに陷らしむ。この四句の意は日あたりのよき谷間に野花の紅なるほとり、たゞ〳〵杜鵑の一聲を漏せしのみなるに、いか

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

なればその一聲のわが心をして玄妙なる境に迷はしむるやといへる趣を吟じ出でたり。

詩人は右なりといふに讀む者をして左なりといはしむるは化工の妙を得ざればなり。讀む者の心かならずしも幽艄あらざるに、詩人の一句たちまちその人の心を馳て寂たる幽玄の音を聽かしむ。こゝにいたりては讀む者の眼一に詩人の想中に入てまた出ることを忘るゝにいたる。深筆の人を動かすこと驚く可しといはむか。

'Thrice welcome, darling of the spring!
Even yet thou art to me
No bird; but an invisible thing,
A voice, a mistery.

まへには杜鵑の一聲をいひ、後にはその心を迷はしむる由をいひ、今またその聲に返る。随て起き随て落るの光景讀むものゝ眼前に顯れたり。この四句にては三度これを歡迎する趣をいひ、されどわが未練のいたすところか爾は鳥と見えずといひ、否、鳥にはあらず眼に見えざるものにして、たゞ一の聲よ、幽玄よと言ひ捨てたり。この眼に見えざるものよ、一の聲よ、幽玄よと言葉を疊みたるは深く之を味ふとき無限の幽味その言外に溢るゝを見るべし、蓋し見えざるものよ、一の聲といふは凡筆と雖も及ぶ可く見ゆ。されど之を一轉して幽玄よといふに至りては、なか〳〵に及ぶ可き筆の跡にあらず。讀みて前の二語にいたるときは、いかなるものにやと千尋の巖下を瞰下すに似たり。幽玄の一語を聽ては、誰か身をそのうちに投げ入れざらむ。

'The same whom in my school-days
I listened to; that cry
Which made me look a thousand ways
In bush, and tree, and sky.

'To seek thee did I often rove
Through woods and on the green;
And thou wert still a hope, a love;
Still longed for, never seen.

まへなる結語に幽玄なる一字をいひて讀む者の情を奪ひし迄を郭公の詞の一段とすべし。さま〴〵なる字句を疊ね來り遂に郭公なる詩題を借りて幽玄なる一結語に落したるは、こゝに後十六句を照應せしめんとの用意深きを見るべし。この八句の意は前段現在の「形」に對して、疇昔を忍べるその心を「影」に宿せるなり。即ち往時を追懐するに、われ幼くして學校に行きし頃また爾を聞きしことありといひ、そのおとのさやけきはいづれより落せしにやと叢を見、林を見、空を見

たること幾度かといひ、儞を尋ねんとして林下を彷徨ひ草間を分けたれど遂に儞の影を見ざりしが、今にいたる迄儞をわが「のぞみ」とし、わが「愛」となせりと吟じ出だせる之。前段後段こゝに至りて相對し、ウオルヅオースの風狂讀者の眼前に浮ぶ。

And I can listen to thee yet;
Can lie upon the plain
And listen, till I do beget
That golden time again.

この四句の意は前四句の意を受けて、儞を見ざれども猶草間に横はりて儞を聞くの樂ありといひ、わが再び夢想境に歸る迄は儞を聞く可しと吟ぜるなり。夢想境の一語こゝにいたりて前段の幽玄なる結語に對すといふべし。

O blessed bird! the earth we pace
Again appears to be
An unsubstatial faëry place;
That is fit home for Thee!

このおはりの四句の意は、郭公を指してあはれ幸ある鳥よ、われらが歩めるこの大地も虚無不可思議なる一想境と見ゆめり。これ儞が住ふべきところなれ、儞の歸る可き宿なれと吟じ畢れるなり。

されば、われも幽玄なる想見なり。儞も幽玄なる想見なり。いでや共に浮世の外の風興を盡して幽玄の詩界に歸らむといふは、郭公の詞の眼目とすべきものなるべし。

蓋し郭公の詞の如きは偶然に言ひ捨てたるなるべしといへども、またあまりに言葉のつゝまやかなるは、これウオルヅオースがポープの俗を抜くに鋭意なるのあまりといふべくして意を新しう詞を花過ぎざる様用意せるところを見るに足るべし。ポープは"He died Poor."といふの俗なるに堪へずして"He died in an indigent Circumstance."といひたりしとて世の識者の笑を招きしが、ウオルヅオースをして之を選ましめば渠まさに喜で前者の入耳に入り易きをとるべし。かれは調の俗なるに堪へずして而も俗となり、これは詞の俗なるを厭はずして而も俗ならず。詩眼の高下、文人の筆端に落つること驚く可きのいたりならずや。

ほとゝぎすほとゝぎすとてよみてけり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

小說

星夜（讀切）

脫蟬子

晝もし長からば物を思ふひまなくて好かるらむ、否夜もし長からば樂しき夢を結ぶ事もありて好かるらむ。晝にはわれ晝の思ひあり、夜にはわれ夜の思ひあり、いづれを安き時と定めん由はなけれど、もし晝と夜との境なる薄暗の慘憺たる時の苦がさを思へばわれは事務緊き晝か夢長き夜かの一を樂しまんとするなり。

始めて彼女を見たるは厚生館に音樂會のありし時、その時彼女は七草を散らしたる裾摸樣を着て皎々たる素手を伸べ金石の音を唇頭に轉ばしてアルトの獨誦をなしたり、喝采の聲湧くが如くに起りて動搖めきわたる中に一曲を唱し終りて坐に就きしが、やがて友らしき令孃と共に見へずなりぬ。次に彼女を見たるは我友人なる某新聞の記者が松の三日に歌留多會を催ふして少年男女を招きける時、その時の一座にも彼女は加はり居りて小捻の糸の緣の端、同じ組に膝を幷べて二た口三口言葉を交はすも不思議なるかな迷ひの始め。

其後同じ記者を訪ひたる時に彼女が姓名をそれとなく問ひ試みたるに、記者は何心なく彼が在りたる學校、彼の家、彼の性質までも問はず語り。これを始めとして折々彼女の噂さをする我言葉に流石こもれるものありしを見て取りし我友は或夜の閑談に我爲に周旋の勞を辭せざるべしと言ひ出でぬ。兎も角もして玉へと應へて別れたるが此時より我夜は長くなりぬ。

頃は春の初めなり、我友は滿面に香はしき笑を湛へて根岸近き我閑宅を音づれ來ぬ履脫より上ると齊しく我肩を一二擊して「これより君の家に永久の春は宿らむ、うぐひすの鳴音を家内にて聞くは樂しからずや。」我友は彼女の父に緣故あるを以て明白に我が今日の位地を語り我將來の希望を告げ、世に賴母しき男なりと言ひて其愛女を嫁すべき機會至れるを促がしたるなり、彼女の父は始終默聽し居たりしが我が從來の品行などを我友の說き終りたる後に漸く兎も角も娘の心中もあればと言ひて其日の我友の勞力は濟みしが幾日か經し後に娘も他意なければと言ひおこしたれば車を飛ばして吉報を

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

癒らし來りしなり。　斯くして約は結びたれど彼女は未だ修むべき學業のあればとて尚ほ一年程は合歡の禮を擧げぬ事となりぬ。

もし我が彼女に會はぬ前の事を思へはわびしげなる野中の松に風の當り易きが如く世の事物に感觸する事多かりし、彼女の情を得たる後は物として春の色を帶びぬはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたるかと思はるゝ程に、苦く辛らく面白からぬ物に隔たりて甘く美くしく優しき物のみ近づきぬ。肥へ太りたる駒にうち乘りて春の野に遠乘したる時菜の花の朝日に照りかゞやきたる畦を過ぎて緩々と流るゝ小河の岸に優々と駒を立てたる心地は此戀の眞味なり。

彼女が學校の歸り途などに我家を過ぎりて安否を問ひ呉るる時我はまことの友を得たるうれしさに後は斯くよ、斯くして斯くよなど將來の事業を打ち開けて語りなどしつゝ彼女の嗜める音樂の道に就きて談話する事もありてその樂しさは、その甘さは言もて得盡くすべくもあらず。

翩々と蝶の花上に舞ふ頃となれば我も浮かるゝ戀の羽あきを恨み、彼女が許に使ひして郊外に策を曳くべきに伴になりてよと甘たれたる文を届けて呼び寄せたる事もあり、緑新らしく添ひたる松の樹影に小憩して清く甘まき物語の盡くべき時もなし、自らも怪しむ程に多辨になりて聽く人あらばおかしと思はんなどうち笑ひし事もあり。　その人の現前は我に取りて「光」の如く、暗夜を照らす「月」の如く、よろづの曇れる思想は妖魅の日光に會ひて消ゆるが如くに我を離れ去りて一面の玲瓏れる王路我前ゑ開きて我行住に世ならぬ自由を供すと觀ぜしは僞言ならず。　鳥の聲も昨日に異なれる妙韻を吟ずるやうに覺へ、花の色も昨日とは異種なる天然の靈妙をあらはすと見へ、歩々人境の外に出で踏々天外の香を薫じ景狀すべからざる樂寂の境地に長き春の日を暮らして黄昏の家路の旅は疲れ果てたる夢の中にあり。

斯かるもの我が迷ひ入りし春にてあるなり、我は迷ふと云ふ字を好まず然れども過ぎ去りたる今日より昨日の事を思ひかへせば迷はざりしと辨ずるも要なし明らかに我は春といふ魔に翫弄せられてありしなり、いかにとなれば、月は五度ほど圓くなりてまた缺けたる後彼女の母なる人より、我に一書を送りて其の愛女を我靈魂より引き裂けり。　その文言を

見れば唯だ彼のごとき者を差上ては御爲にならずと存ずる故にとあるのみ。

彼女よりは一言の音信もあらず、母に同意したるか、又は母の同意を促したるなるか、かつて我が事業を打明て語りたる時に樂しそうなる面して我が肩に憑りたりし時の躑躅園の歡意は彼の遊女の賣色の笑ひにも似たる一時の假造より出でしものなりしか、否な左程の下品の女子とは誰が目にも見ゆべき道理なし、我が戀に盲したる目の咎にもあらじ、そも何者か我が外に彼女の情を釣りたる人のあるか、左る惡性の男に容易く靡くべき無智のものとは思はれず。

何か言ひおこすならむと待ちに待ちたる日の數も三日を過ぎて礫の音もなし、腹立だしさにその人の寫眞を取出で眼を閉ぢながら引裂きてうち捨てんとするにあやにくに閉ぢたる眼の自然に開らけて其人を見れば曾ひし日の笑顔にて我前に立ちけり。笑顔かと思へば涙あり、涙あるかと思へば浮き浮きしたる無邪氣の顔となりてうつれり。はては揚弓場あたりに見る紅粉に腐りたる面の色をうち傲して我を尻目に見るかとうつりて思はず持ちたる手を離れハタと机に音すれば忽ち元の戀人なり。信じつ疑ひつ、迷ひつ晴れつ、夜一夜燈火の油の燼へつくるまで取り出しては仕舞ひ仕舞ひてはまた取出しつ自らも怪しむほどに狂はしく意志の弱き男となりぬ。

明くる朝早曉に家僕を呼醒して彼人の家に最後の使者とならせぬ。咲のこりたる山吹の花を採み散らして彼人の寫眞と幾通の彼人の手書とを封じこみて送りかへしたり。そのかへりに我が寫眞と我が書狀とを送りこしぬ、その書狀の中には月と共に醒めて夜越に書きたるものもありけり。

我は婦人の情の斯くも變はり易きものなる事を信ぜんと欲して信ずる能はず。男心を夏の空に譬ふるに男に情なしと云ふ意味にや、男に情なしと言ふ意味を夏の空に寓する事をなさば女に情なき事をいかなる言葉もて言ひ盡さんや、否々我は彼女に忘れられたりとは知れども彼女を以て我を欺きたるものなりと言ふことはなすまじ、我を欺きたるもの彼女の如くにして彼女にあらず、彼女を圍みたる春の色○○○こそ我を迷はしたるものにてありけれ。彼女の雙眸の內にわれは我が情思を投げ入れし其反酬を求むるに切なりし時を回顧すれば惘然として我が現在の境界を知る能はず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

再たの夜は來れり、古今の雜書を亂抽して眼を紙上に注げども心は遠く枯野を馳せめぐれり、今朝散らしたる山吹の花片の落ちて坐上にあるを拾ひあげ、鉛刀を右手に持ちて細々に切斷し、斷又斷針の頭ほどに細斷して窓の外に投げやりぬ、どこへ散りどこへ落ちしか花の行方は。

この夜はいつになく蒸し苦しくて寢られず、上野の鐘の響近う聞ゆれど數ふるもうるさし、我が書齋は荒れはてたる廣野の如く、我が枕は冷へ凍りたる野中の巖にも似たり、輾轉又輾轉幾度か夢に入らんとして現にかへり、くる〳〵と一つの思ひをめぐり來て復た同じ思ひにかへる、うるさや〳〵と拂ひかける瞬時のみ妄想は消れどあとは再び悲しき戀といふもおぞましや、忘れはてん、忘れん、忘れん、會はぬ昔時よと胸の中に聲を勵ましても流石に衷てには出し兼ね、やがてすや〳〵と眠りたりしと覺えしが自らの鼻息に驚きて飛び起てば胸のあたりを毒蛇に固く緊められしと見たは是も夢なりき。

餘りの事にあきれ果てゝ去らば「眠」りを床の中に求めず、空の景色にても眺めて、眼は兎もあれ心丈にても安ませばやと障子を靜かに推し開らき雨戸をひらきて空を見れば月は西へ西へと落ちつきて慕ひしものゝ影はなく茫々たる虚空に無數の星屑の炳々たるあるのみ。

我友某樂しき春に入りたりと告げし役われ「春駒」と題する韻文をつくりて吉辰の式場に朗讀の榮を得んと申込み置きたり。然るに故ありてこの約破れて我春駒も用なくなりたるは是非もなし。頃日「春駒」を疊作して紙上に載せんと企てしが筆力澁滞して幾度か稿を更へぬれども遂に成らず却つて星夜一篇を得たり、これも我が舊稿の中に數へられん事を願ふなり。

透谷生附記。

批評

奴の小万（ちぬの海濱六著）

天知子

天風月を吹て欄干に入り。烏鵲無聲夜闌に向んとす。織女明星、枕上に來たる。乃ち知る身人間に不在を。

東坡詩人、自然の美に一撃せられ言ふ可らざる美想を發しぬ蓋し自然が東坡に詩を與えしに非ず、東坡僅かに天眞に誘導せられて眞率なる東坡を吐きしなり、我浪六の小說を讀む毎に此感あり、獨り頷づき無言に微笑むのみ、烏鵲無聲に飛ぶ所、天風月を吹て織女枕上に來るの感深し、讀過して身書外

の人たるを知らず、思ふに涙六は俠者に據て俠者を眞く描きしに非ず、涙六僅かに俠者の傳紀に據りて眞面目なる涙六を描きしなり、嗚呼涙六は俠者なり、俠の知己あり、吾が知己なり。知己を評すると極めて難し、評眼未だ皮肉に徹せざる中早く同好知人に遇ふ心地して、言ふ可らざるの趣味に擊たれて先づ盲となればなり。批評の筆を下さんとすると既に幾回ぞ、三日月にも果さず、女之助にも果さず、終に小万に至て一評せざるを得ず。

俠を描かんとして俠を弄せしものは三日月なり、吾れ讀んで快筆なりと叫べり。俠を忘れて能く俠を現はせしものは女之助なり、我れ讀んで同情の喜涙に咽べり。俠を沒了して緻密に俠を現はせしものは實に此小万なり、我れ讀んで感謝の聲を發せり。今日小万を讀むに至て始めて涙六も大俠を味ふの人たるを知りたり。文辭は例の短句强深、俳味歷々として言外の言に物言はす、今更評するも稚なし。

全編を評するに三時期に分つの都合好きを思ふ即ち

第一、お雪の時期――　俠氣產出時代

俠氣も他の性質の如く、遺傳と境遇とに由りて發生するものなり、壓制的破壞室家は氣慨ある小兒に俠氣を敎ゆる學校なり、悲哀憐愍は此學校の入口なり、絕躰絕命の困苦は此學校の敎課書なり、木津宗兵衞の娘お雪は實に斯の如き境遇にして、而かも最も劇しき中に描き出されぬ。第一回より七回までの間に於て、お雪は最も悲慘困苦の荒波に捲まれ、宛然たる憂愁喪家の乙女を見る如し、然れども細かに觀察すれば第四回に於て早く大俠となるべき性質たるものを微かに現はせり、十一歲の少女にして多く困苦を言はず不幸を泣かず、沈默憂鬱にして多感深情の氣質を描けり、其百軒長屋の貧女に憐愍の情を動かし、一身の困苦を犧牲として甜瓜と賣上錢を惠み又は惡漢佐助を憎む所、俠の本質を始めて明かにす、

「エヽまゝよ我身の末はさ少女ながら天眞果斷の色に、會釋なく財布の底を叩いて……………」

「おろかやたとさへ生甲斐もなき今の境界、みんごと死なん、されど思へば飽まで憎き奴かな佐助め、いづれ人間の係あるに相違なけれど一目みたし其面相、さる年は十三この腕細くさもおのれ佐助め」

宗兵衞の放埓、お浦の毒惡、良妻の困苦、惡漢の風采等を巧みに操りて何れも濃厚の筆力を活動せしむ、殊に銅盥の水を胸の怨火にて溫たむると、及び女房折檻の礫打ちの如き、井の中より女の髮の毛出る所など、殘酷と凄絕の極を以て涙

六が得意のサブライムを現はしたるものなれば、思はず刮目して再讀するに至る、唯俠性を鍛えん爲めとてか困苦無殘を一聯に掲げたるの多きに失するとなきや、宗兵衛薄雲の殘酷と農家夫婦の無慈悲と佐助の酷薄とは、過ぎたるは及ばざるの感なき能はず、然れども涙六が俳諧的の高韻妙調は少しも厭惡の感を與えず、寧ろ此等の失點を恍惚醉眼の中に見失ふと多し、何たる魔筆ぞ。

第二、お万の時期――――大俠修養時代

思想野卑にして良心高潔ならざる俠は、到底大俠に成り難し、殊に高尚なる戀愛の淵に一度沈淪せし者に非ずんば多く大俠を養ひ難し、お万は實に此境遇に於て大俠たるを得たりしなり、武家の氣風に俠骨を肥やして皮肉を着け、傑士の戀愛に情の秘訣を誘發せられて俠肉涙を籠めぬ。余は此時代を以て最も能く描きたるの筆なりとす、何となれば俠の伎倆を現はす場合なくして能く俠を現はしたればなり、最も上品にして温順なる中に、チラ〳〵と其本性を現すもの、例へば

「まして妾の身、今そちが命と仰せらるゝとも決して、せめて御恩の万分一とも心得、あり難きとに存じます」

「お万、うまれて謹愼深きがうへよろづに優しければ、身を責め心に耻ぢて人一倍の苦みに胸痛むれど、さて斯うと思ひ据へては一念なか〳〵に動かず……ましてや始めはおぢ怖れて後は脱兎の如き心の底を、」

「年よりはふけたお万樣」

「昔しは切水かけし氷の刄ひやりと額に當られながら、につと笑ふて首筋の後れ毛かきあげ、こゝなといひし女もあるに……」

「事に當つて潔よく身をなげ出すは骨硬き經驗者にも唾を呑ますれど、ものゝ情けに逢ふては女の中にも別けて泣虫なるお万」

「今かへり見れば耻かしや、さほどの事には使はれまじき笑ひ顔なる懷劍の手前、なる程まだ若き万なりけり」

「雜踏のたゞ中、もとより塵埃も吹きますれど心は汚されず匂ひは失せず、人は熱さに狂ふも我ひとり涼しう氣を持ちて、鳥居前の茜裾、なんとなく、なつかしう床しう存じます、……唯ものごし意氣が慕はしう心得ます」

此等の如き擧るに遑あらず、其祇園の俠女お轂とお百合とを慕ふて、清少納言赤染衞門等の才女を淡泊に人物を看破する如きに至ては、愈々俠女の大眼を現はす、俗骨と肩を列べて一本路を歩むを好まざる俠相ならずして何ぞ、温和なる冷評の語は俠の烈罵を現はすものならずして何ぞ、嗚呼其人ならずんばいかで此句を吐き得んや、涙六此に至て愈々俠躰の人たるを知る、而して巧みに一伯耆守のみを操作してお万を活動せしむ、怪しむべし松平伯耆守も終に涙六に化して洒落俠骨の武俠を描けり、此武俠亦大にお万を養ひしか。お万を益々大俠に導きたる筧小太郎が、武士道に苦悶せし戀愛の一段と、お万が其擧動と心情とは、讀むに苦しく讀

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

まざるに惜しく、其部屋の裝飾より小太郎に對する言葉等は殆んど腸ぬかるゝ心地す、其戀されし、健げなる人の死に戀を味ひ、竊かに亡人を吊ふに花なければ銀の平打簪に彫りたる櫻に水入れの水を手向けに注ぐ所など、俠性にあるまじくして却て大にあることを說きたる所いよ〱感泣す。

俠氣發動時代

第三、小万の時期——

俠筆最も說き易くして無俠者が俠編なりと見易きものは此時期なるべし、先づ始めに小万茶屋の庭が、俠風好みに成るもれかしく、此編の立者に出でたる洒落の文士柳里恭も、言句悉く俠調と成るもれかし、柳澤權太夫は宛然たる涙六と化せり、小万が毒婦の膽を拉ぐの應對など今更贊むるも大人氣なし、出來上りたる俠は他人に讓りてこそ眞けれ、今更月の圓かなるを贊むる男かわ。其父を殺害せられて、指の生血を不動の畫面に吹きかけての決心より、飛瀑劇落、文短にして氣極めて急、言ふ可らず書く可らず、悟道の一編結尾を括りて大騷後の大閑境、餘情深く、寧ろ惜まるゝなり。

全篇悉く俠と殘酷、悲涙滴々、慘血淋漓、其脚色は女之助に及ぶ可らずして三日月に超越す、而して筆最も老熟す、或はファンチーンの苦境を一層烈しく短く見るを得、或はコセッテの悲觀を一層深く強く見るを得、覓の戀愛はハムレットに及ぶ可くも非ずと雖ども、余は深く同情の感に堪えず寧ろ吾れにはハムレットより深く刻銘したりしなり、れ万の人物は細川侯の夫人に及ぶ可らずと雖ども寧ろ吾れには著しく恍惚たらしめしなり、兎も角今日の無俠社會に此深刻俠女を紹介せしの功を謝せずんば非ず、涙六殿祝し申すぞ。

○關原合戰圖志

神谷道一氏の著なり。氏は、考索七年、尙且つ古戰塲を跋涉閱歷して遂に此の著あり。關ヶ原合戰の原因、端緒、戰前の景況、合戰當日の景況、戰后の景況、の五章に分ち、且つ諸侯興亡概表、及び關ヶ原陣地考證を附錄とす。家康を叙する所ろ少しく遺憾ありと雖ど、三成を記するに至りては頗ぶる備はり、畧ぼ其眞人物を顯はすに足れり。戰形を七の變化圖によりて示す、一時每の掛引歷々として明日なり。讀者をして斯く明白に悟了せしむる迄で、著者の苦心非常なりけん、深く之を謝す。西軍總計十万八千と稱す、然れども、南宮山上の毛利勢、及び松尾山の小早川が手のものを引かば、西軍

の總勢初より東軍に及ばず。而して東軍は、家康總督の旗下に七万五千の將軍掌の指を使ふが如く動き、二十四の使番電話線の八方に走るが如く瞬速に使命を運ぶ。之を、小西及び島津の兩將戰未だ起らざるに反意し、浮田及び大谷の二軍隨意に運動し、秀吉以後の大才子、孔明卒後の姜維遂に其全策を施こすと能はざりける。西軍に比しては、早く既に勝算を得たりと云つべし。然るに東軍を擊却すると彼の如く數ばなりしは、壯なりと云はん。島津義弘、歎じて曰く、我弓矢を取り異域に在りと雖ども終に敗を取らず然るに今ま石田が愚將の逆謀に與し老後に謂れざる敗を取れるは生前の恨なりと。然れども、此の老將軍をして先づ西軍に加擔せしめたるは三成の力にあらずや。讀者もし此書を熟讀せば、啻に戰形を委細に知悉するのみならず、更に多くの得る所ろあらんとす。

〇匏菴十種

近頃こそは、彼處、此處に舊幕時代の習風を書記すものもありと云へど、明治十三四年の頃に於て、早く其範を示したるは、栗本鋤雲翁を初とす、詩に云ふ、

門巷蕭條夜色悲。鵂鶹聲在月前枝。誰憐孤帳寒檠下。白髮遺臣讀楚辭。

此の悲歌の作者、嘗て親から經歷する所ろによりて臆起隨錄す。揣摩推測せるものと違ひて后進を益すると頗ぶる多し。中にも、岩瀨肥後守の人物、横須賀造船所經營の始末、下の關償金の顚末、兵庫先期開港案取消の談判の如きは、翁に聞くの外、他に耳にすると能はざるものたり、幸ひにして今ま一冊子となり、不朽に存するの運びとなれるは、祝すべきとなり。開卷第一行に云く、

幕廷にては軍國の仕來りにて殊の外に目付の役を重んじたり抑も此官は祿甚はだ多からず位甚はだ高からずと雖ども諸有司諸職に關係せざる無きを以て極めて威權あり

云々

而して、翁は實に醫家子弟より擢でられて目付となる、堅志剛英、幕末の一人物たり、而して深く自ら謙藏せらると雖ども、既に開卷第一、岩瀨肥州に對するの評は移して以て此人に呈すべきもの也。犬養毅君、門人として翁の傳を謹んで記し、結文に云く、翁今年、年七十一、猶ほ木强武人の老て益々壯なる者の如く絕へて學者政事家の老衰したる者に似ず、と。

雜録

田舍嘆（客員）在故山　方寸子

○野人の繁忙

下越の地、十二月より雪降る。爾來翌三月に至る殆んど四ヶ月の間は、或るは山に小屋掛けて炭を燒き、或るは峯に攀ち登りて柴を伐り、或るはソリにて稻田を養ふべき肥料を運び出し、其他は茅屋に閉籠り、大方は藁仕事などして、僅かに衣食の用を償ふ。田舍幾万千の野人は、實に衣食の追跡と、盆正月や月に數度の休日と、旦那地主とあるを知るのみ。憲法發布せられたるも知らず、議院開けたるも知らず、況んや超然内閣の更迭をや。曩きに議院改選の事あり、吏民兩黨必死となつて相爭へる時、野人撰擧權を有せざれば、政黨員は見向きもやらず、偶々有し居る者ありと雖も、平然自ら棄權して、日常の勞作を欠かざりき。

山中暦日なしと雖も、慈愛の天、四季の德を違へず。都城の人、今や郭公世をうの花に忍び音を啣つの時、田舍の老少男女は元氣好く俚歌うたふて働く也。見よ田植の繁忙に餘念もあらず。

○野人のホーム

旭日輝々として山の端に出でんとする前、相携ふて田圃に上ぼり。暮色蒼然として次第に落つるの頃、相伴ふて家路に歸る。看よ終日の勤勞を印したる鋤鍬の汚泥、淨められて村郎の肩に在り、看よ健氣なる野婦、小河に足洗ふて幾十歩跡を追ゆく。忠實なる豪犬の勇みいさむで、振り顧みつゝ飛びゆくは、何を知らせんとの心にや。想ふ彼ら日暮れ足勞れて茅屋に歸る處、家老爐邊に晩餐を用意し、兒童門に呼んで歡び迎ふ。松の木の燈光、草蘆烟りに堪えずと雖も、金殿の電燈よりも明かに。一汁一菜の馳走、鹽梅辛らしと雖も、八百膳山海の珍味にも勝るなるべし。あゝ出でては淸淑の田野に心を合せて共に稼ぎ、入りては飾りなき一家の團欒を打くつろぎで樂む。茅屋のホーム卑陋なりといふと勿れ。彼等が辛酸の世に堪えて生を樂む、蓋しこの樂園を有すればなるべし。

○野人の困窮

人は社交的の動物なり、必ずや世捨人たるべからず。人や亦

天性自然の風光を愛づる者なり、決して社交に俗殺せらるべからざる也、若夫れ社交を樂んで自然の風光を愛で、自然の風光を愛でて社交を樂むとの人生の至樂なりせば、彼の野人は生れながらにして其の至樂と特權とを專有するものと云ふべし。

ヤヨンソン翁と偕に政界を諷するの聲あり。ポリテシアンの爲すとは爲すが儘に任せよ、源盛平衰、一朝の流轉に過ぎず、敎師は常の如く敎へ、百姓は依然として耕やし居る也と。されど田舍の野人は依然として耕やし得ざるを悲む。蓋し文明の大勢の我邦に入るや、都府は之を持囃して地方田舍に齎らしたり。文明これ何ものぞや、至る所ろ義理人情の美風を破壞して、弱者いじめなる優勝劣敗の怪魔を暴れ廻らしたり。法律何ものぞや、人權を平等公平に保護すべきなるに、奸才の智者には不當の庇保を爲し、無智の野人に對しては酷薄の宣告を與へける。憐むべし無智短才の野人、見る〳〵產を破り家を失ふて、只だ敏捷奸才の徒、一躍して富豪——地主——旦那——の全權を握りぬ。想起す明治十二三年の好景氣ゆめの如くに忍ばれ、爾來疲弊は年と共に野人を驅り立て。民力休養の聲空しく響きて、追々と迫る租稅の貢ぎ仲々に重く。繁文の政法いよ〳〵進みて、無文字の野人は益々苦み、自治制の恩澤何處に存すべきものにや、酷薄なる富豪の得意想ひやられて、何事ぞ自業自得の冷嘲を聞くのみ。嗚呼嗟々文明の大勢よ、明治昭代の法律よ、幸福なる富豪よ。哀れ野人をして、汗もてパンを買ふとを得せしめよ。

閑文字

(一) 苦中の樂　（客員）禿木子

逆境にある人悲哀極て胸底幾多の波瀾をおさへ別にかすかに閑天地を望みて靜に微笑するを見る程情切にして哀れ深きものはなし、松陰が獄中にて

> 幽囚不恨送青年　已將身跡附蒼天
> 世上風波不到處　靜對遺編意悠々

といふか如き西行か

> 花をみし昔の心あらためて
> 吉野のさとに住んとぞ思ふ

といふが如き共に言外無限の意あるを覺ふ。

（二）等阿法師法語

等阿法師とは世にいふかるかや道心なり、修道の山下に愛兒に逢ふて涙を呑みて之と別れたる如き人の知るところなるが
その法語に
晝あれば夜ありとしるゆへに燈のそなへをなす、暑あれば寒ありとしるゆへに秋の砧の音たへず、老のねぶりを驚かせども生あれば死ありといふ事をしるやしらずや、つれつれとの用意のなきに如何なる心の怠にや、無常迅速なりたゞ今にも死期到來せば如何せんや、もし我言をもちゐんと欲せば何れの時にてもあれ只今いのち終と思ひ萬事を放下して南無阿彌陀佛と念ずべし、時と處と淨と不淨と不選忘れざるを第一とすゆめ〳〵怠ることなかれ

山さくらまだ一花も散らぬまは
　心のよそにきくあらし哉

また一身をさゝげてひたすら道を行ぜし人なりしを知るべし

（三）譯詩

高野師直が鹽冶判官の妻に贈りし歌に
返すさへ手やふれけんと思ふこそ
　我文ながらうちもをかれず
とありしを徂徠譯して
我思美人貽之書　美人不見棄庭除
吾拾吾書歸十襲　心謂美人手所觸

昔長崎に
月をみんとてうす雲見れは空に知られぬ微雪ふる
といふ歌はやりしを或人清人に譯を乞しに即吟して
欲嫦娥望白雲　春月朦朧微雪紛

蓼太が句に
五月雨やある夜ひそかに松の月
といへるを清人程劍南が詩につくりて
長夏草堂寂　連宵聽雨眠
何時懸月色　松影落庭前
蜀山之を見惜むらくは其情景を盡さずとて
尋常五月多陰雨　一夜松間微月露

俯思郷國仰思君。日夜憂愁南北分。唯喜閑來耽典籍。
錦衣玉食本浮雲。　東湖

天地管見

六合學人

（五）眞心に恥ぢず

余常に思ふ、君子は行くに徑に依らず、先導者は人の踵ぐに差支へなき大道を履まざる可らずと。故に、通常の人の言に、「眞心に恥ぢざる故關せず」と謂ふものを聞く毎に、其の自任の輕きを憐まずんばあらず。若し眞心に恥づることを爲さば之れ大罪なり。然れども大人は眞心に恥ぢざる行爲の中に更に多くの省慮念思すべき覺悟を懷くもの也。

（六）名譽に掛念せず

右と同じくして稍や異なるは「人の評判に關せず」と云ふもの是れ也。是非褒貶は浮雲の如し、鹿と呼び馬と呼ぶは他の謂ふまゝに任ずなど申す語ばありて、かゝる無容赦をもて壯んなりとする風あり。小膽の人之に乘じて勇を裝ほひ、世評に關せざるまねして高しとなすものあり。同じく憐れむべきの心術なり。凡そ人は一面に於て弟子たり、他の一面に於ては先覺者たらざる可らず。先覺とは傳道を意味す。他の未覺の人に對して眞理を發揮せずんばある可らず。此時に於て人をして誤解せしめ、暴りに我が本眞を誤まりて而して吾言ふ所ろをも併せて疑わしむるは、悲事にあらずや。之をしも關せずと云ふは、人を愛せざるの徒なり。但だ夫れ世評に掛念するの本志自から俗人と異なることを要す。俗人は世評によりて死活するなり、君子の其世評に於けるは、明月の雲に於けるが如し。雲の之を蔽ふを歎ずるは、其明光の損せんことにあらずして、光を天下に分射すること能はざるの故なり。光は決して雲の爲に滅ずるものにあらざる也。故に君子は、人をして誤解せしめざらんことを希ふ、誤解誤評は我に於て損なし、たゞ彼の上に損あらんことを憂ひとす。此故に、基督は深く世評に掛念し、數度び他の誤解を釋かんとせり。ペテロ、ヨハネ、パウロ又切りに其譽れに注意したり。何んとなれば彼等は其榮光を顯わさんことを欲し而して其榮光は悉とく神に歸す可しと信じたれば也。令聞は、是れ聖經中に屢ば見る、人德要素の隨一なり。

（七）智及德

若し智斷の足らざるを罪とせば、人は常に罪人なり。人つねに罪人たりと覺らば安心立命を得ず。人は、其當時の情狀に

於て、善なりと認め、義務なりと感じ、而して在ん限り出來可き丈の氣力精神を盡して爲さば則はち德たり。たとひ異日顧みて其の欠典を發見すと云ふと雖ども、之をもて當時有罪とす可らず。罪は智斷の上より來らず、道念の撰擇捨取する所ろ何如んと云ふに關す。

果して然らば、人は其智を研くとを要せざる乎。曰く否な。心術既に是なりと云ふとも、施こして人の益を計ものは、處置の利害賢愚を明らかに明斷せざる可らず。故に智を要す。且つや智は一個の人德なり、其用の何如んによりて之を尊とむは尙不可なり、智は夫自身に於て一の美德なり。神は全智に在ます。人は亦た智を求めずんばある可らず。

德斷是非は人の當時の情狀に於て決すと云ふ。當時の品格に於ての十分を覺悟し、更に進みて亦た十分を覺悟せしとありとせんに、其間の品格の進步は、以て善功を增すに足らず、善功は其前后に於て比較的均等なりと云ふ。果して然らば、人は品格を進むるも進めざるも可なり、聖なるも俗なるも可なり、要は、其當時の情狀に於て只だ十分を盡すにあるのみと云はん哉。人此に至りて惑ひなきと能はず。然れども、此惑は德の用と德の報とを思ふによりて生ず。德を慕ふは、其用と其報との故にあらず、實に德其者を慕ふ也。而して遂に天の父の完きが如く完からば何等の安心ぞ。

時事

○朝鮮問題

神功皇后より、太閤秀吉を經て、西鄕隆盛、及び壬午の亂を一串す。朝鮮の如きは、我國の外交思想を惹く尤とも熱烈なるものにあらずや。而も因循として定算未だ決せざるに、東方問題の要戶早く彼の魯士亞に向つて開かんとせり。

○新聞紙上外交論

新聞主筆は紙上の總理大臣たり、一辭一言尤とも愼重ならざる可らず。特に其の外交に關するものに至りては用意一層謹密ならんとを要す。然るに近頃ろ府下の大新聞に、朝鮮を攻取りて何如にかせんなど論出せるものあり、筆法に頓着せざるも程のあるものぞ、太たく歎かれたり。

○司法大臣

法典問題を如何にせん。行掛りより一意に之を其儘斷行せんとするは然る可らず、左れど全然之を延期して毫も緩急の處置なきは亦不可なり。弄花事件を如何にせん、其病根深く士中にあり、單に落花片々の跡を尋ねて空枝を眺むべきにあらざる也。而して此等情實綿纏たる難件を利斷し快刀一揮して甘まく之を解くは新大臣の能所亦長所なり、吾儕深く望を掛く。

○鐵道會議

議員の撰定近日の內にあり、果して何人を得べきやと案じ煩らふ。十二年第一期の鐵道未だ成らざるに當りて、地券賣買公債商法の弊竇を蒙むること寧ろ多きことなきか。誰か第三期議會に於て此の大經綸の確立することを堅信せり、而して今や用意早々として成らんとす。或人曰く、前議會中の最大決議は、撰擧干渉の問題なりと、左れど此は當然の決議にしてさして珍らしきものに非ず。但だ夫れ鐵道敷設の事に至りては、議會ありて以來の最大工事、其影響數十年の后に渉らんとす。而して、四歳一世の議員諸公は、之に向つて責を引くの覺悟や、輕きに失するにあらずや。

○國民協會

之を懇親會とする方寧ろ相應はし、此會に於て方針を一定し政綱を議定せんとするは、其使命に非ず。國民協會は 消極的に生來せり、其天職は批評にあらん、結構は其の長所にあらざる也。

○敎育者を敎訓せざる可らず

吾等が小學校に在る頃ろ、年中度々小學讀本を變えられ、其の何の故たるかを解せず、頗ぶる懷疑したるが、今にして略ぼ其由緣を知れり。吁、文部大臣は、各地の敎育者に內訓して、敎科書利賣の濫弊を防がんとせり。夫れ此弊流行の太甚しきは擧證するを要せざるほど也、而も大臣をして公然此の內訓を發せしむるの極度に至りたるは、醜旣に極まると云ふべきなり。

孤女學院の大須賀兄、並に之を助けんとて行たる二女生皆な腸チブスを患ひて目下第一醫院に入り、孤女數名亦現に患にあり。同念の兄姉に告ぐ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

◎按摩術を以て盲者特有の業となすの議

中川恭次郎

世に不幸なるものは種々あれど其最なるものは不具者に如くはなし何となれば彼等は生涯人間に享有すべき快樂の或部分を全く受くること能はざればなり不具者は種類亦多かれど取りわけ多數にしてしかも尤人生の幸福を欠くものは盲者に若くはなし何となれば器官の中視器より受くる所の快樂は尤多く且此官能の欠乏は他の官能をして充分其用を遏せしむる事離ければなり今や文明を以て稱せらるゝ國には何れも盲啞學校の設けありて是等不具者の爲にするの教育あり其法具はらざるにあらずと雖も如何せん不具者は其教育によるも素より他の健全なるものと相競爭して世に立んことは望むべきに非ずもし或職業をとる場合に於て健全者と競爭するが如きことあらば勿論不具者は敗るゝと必せり故に今不具者の生業を安全ならしめんにはこれをして其欠けたる器官を要せずして成し得る處の一種の業を學ばしめ且此業に他の健全者の競爭するを制する方法を設くるにあり其方法とは何ぞ一種の業につき官府に於て規定を設け他の健全者をして是に從事せしむるを許さず全く不具者の特有となさしむること是なり所謂一種の業とは即盲者に於ける按摩術の如きを云ふ（啞人聾者の如きも亦もとめなば相應の特業あるべく盲者もまた此業のみの保護を與ふるは尚充分なりとせずされど今は先づこれに就てのみ云ふべし）

或種類の人に或職業の專有權を與へ官府より是を保護するが如きは之を通常人に施さば其弊害の多からんこと素より言を待たずされど不具者にありては然らず思ふに凡そ社會の公衆は百般の成業に從事して不可なることなしと云へども不具者のとり得べき業務は僅々數種に過ぎずして必ずしも健全者は其範圍内にまで立入らずとも他に幾多の生業をもとむる事を得べければたとへ不具者の或一二の業を專有すればとて夫が爲に困難を感ずるが如きことはあらざるべし盲者に於ける按摩術の如きことに然りとす音樂唱歌の類の如きも盲者の從事するに差支なき業なれど其物たる美の術に屬してもとより是を以て盲者特有の業と定むべき性質のものにあらず故に余は他にしばらくおき先づこの按摩業を以て盲者の特有となし其生活を補助するを尤必要なると思ふなりあはれ世の慈惡心に富める人々よ何ぞ是不幸者の撃援をなしてこの目的を達せしむる爲に一臂の力をそへたまはざるまた世の盲者たるものも集りて一團結をつくり互に相提挈して此目的を實行するの方法を講ぜんこと余が尤希ふ處なり尚言ふべき事あらば再びすべく且當時眼明らかなるものにして按摩の職をなすもの丶比較なども次々調ぶべき見込なりこゝには先づ大要を記して大方の贊助を乞ひ置くのみ

當時の文學界を見て

悠々庵主人

余が袷の青かりし好んで英の雜稗を讀み又ミルトンバイロンの韻語沙翁の詞曲を繙きたりし。當時思へらく嗚呼西歐文學の美は又國人の夢想だもせざる所なり。吾が文學が進んで彼等と比肩して耻づるとなきに至るは凡そ幾百年の後にあらんかと。風雨の夜明燭の下に書籍の中より篇を抽んでゝ之を繙く毎に馬琴春水種彥を顧みて常に歎慨せざるとなかりき。爾後俗務鞅掌又詩文を樂しむを得ざりき。この頃文運隆興三年四年にして將に西歐の文字を追驅する道路に上れり。され共昨今大に其勢挫折して行歩はかどらざるは抑何の病ぞや。ひそかに文學界を見れば互に批難攻擊空論を吐き喧嘩して止まず自己の光輝を研ぐを恐るゝ者の如し。今日の詩文未だ幼少何ぞ論評を假する者ならんや。今日の筆作は相見て互に赧顏の事のみ唯後日に耻ぢざる程の偉動を立て之を蔽ふべきなり。文化日進神田の私塾に於て沙翁の集を讀み習ふ時必ず來らん漸くにして文界も澄淸し審美の照覽鏡を以て當時の文士を見ると必ずや今日の花月新誌東京新誌を見るが如き觀を爲すの日あらん、されば今日秀才の士は唯々孜々勉勵我が技量を發達すべきの時なり余諸士の文字を讀む毎に望む所は讀書にあり。西詩は實に根本なり基礎也。願くは道樂に書く勿れ洒落に書く勿れハデに書く勿れ我が蜻蛉洲の言の葉に忠せんことを

Suck shameless bards we have; yet't is true,
There are as mud, abandond critics too——Pope.

青年の責任

蘇溪生

起きよ起きよ新日本の青年起きよ吾人が往する所の社會は死物にあらずして活物なり吾人が學ぶ所の學術は死道にあらずして活道なり。

世、時と變じ道、人と進むは是れ固より造化の趨向にして宇宙の大勢なり何者か能く此大勢を防遏するを得ん時に社會の眞面目を穿つ能はざる偏僻なる不義なる因循固陋の腐儒者等が漫に權謀術數を施し空手を以て此大勢を支へんと欲すと雖とも恰も一髮地球の運轉を止めんと欲するが如し實に其の淺慮を笑はざるを得ず實に其の愚を悲まざるを得ず然と雖とも民智未だ開けず理念未だ起らず舊習を以て社會を網羅したりし古昔の變代に在つては此大勢なるものも其の威力極めて徐々にして獨り具眼者にあらずんば之れを知る能はざる程なりき特に我日本の如きは守舊の性に慣れ社會を以て千万年も易ふ可からざるものと思考し太古の流風余俗を現存するは却て國家の面目の如く妄信したりしも幸ひに浦賀の一發は我國に維新の革命を報ぜしめたる曉鐘となり爲に千歲の迷夢を撞き破り廓然として天開け地廣まり鐵鎖斷ち冥信醒めて日本の日本は初めて世界の日本となり日本の人民は初めて世界の人民となり守舊の社會は變して日進の社會となり又此に於て社會の現狀凡て面目を一新せざるものなく純然たる舊物は殆んど其の痕跡を今日に絕つに至れり就中此激動を感ぜしは學者社會にして學士論客の學海に肝膽を碎き熱血を注ぎ縱橫上下雌雄を千歲の下に決せんと欲するもの今日より盛なるはなく所謂世時と變し道人と進むものにして筆戰舌鬪初めて紛亂の緖に就けり嗚呼自然か人爲か氣運か變遷か此千載一時の今日に遭遇し區々碌々瓦石と均しくせんとするか將た奮起卓立心思の全力を極めて以て學海の邦土たらんと欲するか吾人は我今日の社會を閲覽して進歩の海に航するには如何なる手段に依る可き歟如何なる方法を用ふ可きか否な我社會進歩の羅針盤なる吾人の意向をは如何なる點に傾けなば可なる可きか願ふに各種の人をして同一の目的に向て馳せしむることは到底望むべからず企つ可からず、よし假りに一歩を讓りて望むを得るとするも之れが希望を起すの必要なきを如何にかせん故に吾人は意思を同一の目的に向て馳せしむるを欲せずと雖とも只吾人が今日に於て切實に熱心に希望する所のものは其職業の何たるに拘はらず其目的の何たるを論ぜず吾人の意向を改進の一點に傾くるにあり即ち政治家も商賈人も學術家も農工業者も一般に熱心に其の職業に向ふて改革者たることを自任して其目的を達さざれば休せざるを熱望して止むこと能はざるものなり何となれば吾人今日の社會は維新以前鎖國の時と異なり競爭者たる或る他の幾多の社會と併立する時にもて之れと進歩の先陣を爭ひ學海の佐々木高綱となりて先登第一の功を奏せざるを得ざる時なればなり噫進歩の天地は改革の天地なり改革の天地は進歩の天地なり此天地に此社會を組織す吾人青年たるもの豈に眼を改革の點に傾注せざるを得んや豈に意向を進歩の點に馳せしめざるを得んや既に社會の要素たる人心の皈向が今日改革の一點に傾注するの必要あるものなりとすれは吾人は此の改革の氣運が一日も早く我全社會を風靡せんことを熱望せずんばあらず嗚呼歲月人を待たず光陰飛んで矢の如し昨驚花の間に徘徊せしも今や綠陰深き處去つて涼を買ふの頃とはなり又黃草野外殘夜月に虫聲の冷かなるを恨み奧山に紅葉踏み分け鳴く鹿の聲の悲しげなるを憐むも亦た方に近きにあり倏ち去り忽ち來り氣候の變遷風景の變化豈に亦た速かならずや知らず吾人は此氣候の變遷風景の變化の神速なるが如くなるを得可きか吾人は其のなるとならざるとに拘はらず尙ほ一層神速に世人の意向を改進の點に傾くるの方法を講ぜざる可らず噫我青年軍が舊日本の荊棘を開招して新日本を建設せんと欲し始めて我學術社會に生れ出てたるもの亦た止むを得ざる哉それ然り吾人は學術社會のみならず此氣運が我政治社會より商賣社會工業社會農業社會及び宗教社會に至るまで渾て全社會を風靡せんことを熱望して止む能はざるなり蓋し今日の氣運は改進の氣運にして吾人の責任とし義務とし本分とする所のものは只改革の一點にあればなり

片々

修謙子編

●皇后陛下の行啓　陛下には六月廿三日午後零時三十分御出門隅田川上流に於て海軍將校の催に係る端艇競漕會へ行啓あらせられ侯爵德川篤敬氏邸に於て暫時御

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

休憩御覽所へ出御　競漕御觀の後午後五時十分還御あらせられたり。

●皇女御參內　皇女常宮殿下には昨日御參內皇后陛下へ御對顏あらせられたり。

●同志社女學校の卒業生　同校にては今度都合三十三名の卒業生を出したるが右の內新規則卒業生十二人、舊規則卒業生十二人、看病婦學校卒業生九人なりと云

●第四回夏期學校　は七月十六日より昨年の如く箱根山上に於て開校せらる。同志の兄姉は續々入校して靈性の發達を圖らるべし。委細は廣告欄內にあり。

●東京禁酒會麴町支部幻燈演說會　は本日午後七時三十分より牛込拂方町牛込教會にて開かれ辨士は津田仙氏なりといふ。

●高知育兒會　廿四年十月より廿五年三月まで高知育兒會に於て取扱へる育兒の數は九十八人にて、之に要せし育兒金高は四百六十三圓三十一錢九厘、而して同會產婆生徒の取扱ひたる產婦は惣數五十九人にて、入室二十四人、自宅三十五人なりといふ。亦た同會附屬產婆學校に於ては今般給費生七名自費生廿名募集中なりと云ふ。

●高知尋常師範學校　公費生來る七月中に全科卒業の見込ある人員五十二名の內女子十八名ありといふ。

●生徒退校を命せらる　京都府尋常師範學校の男子部生徒二名女子部生徒一名は今回の學期試驗に落第し且つ性質遲鈍品行偏僻にして將來成業の見込みなしとして同校長より上伸し評議の末退學を命ぜられたる趣きなり。

●在外醜業婦の增加　海外各地就中清國各口露領浦潮斯德新嘉坡邊に於ける本邦醜業婦女は近來益々增加し來りて殆んど底止する所無き有樣なるが此增加醜業者中には他地方よりの轉業者と內地の新密航者相半ばせる割合なる由。

●滋賀縣住友製絲場　坂田郡上丹生村にある同場は、目下百五十名の工女を使用し盛大に製絲せるが、工女は何れも熟練の者を撰み從て賃金も他よりは貴く、して製絲の如きも我邦の優等に位せり、主として直輸出をなし居るものにて地方の評判も頗るよろし。

●小兒虐待保護會　マサチユセツト州なる同會は過る年の報告に四千七百人の可憐の小兒を救護せりと云ふ、而して愈々好結果を呈するの運に向へるも當時財政の困難を告げ爲に其美擧も大に遲疑するに至りたるを以て社會公衆に向て之を訴ふるに至りたりと云ふ。

女鑑

第十七號

一冊代金拾錢
六冊前金五拾五錢
十二冊前金壹圓
全國無遞送料

六月廿日發行

女鑑
「我と」云ふ感念は女子にも必要なり

論說
婦人の位置及び婚姻の倫理に就て歷史上の話（三上參次）所謂自由結婚の弊（武谷水城）

史談
小楠公の母（三木五百枝）松下禪尼（藍村秀）

家政
育兒小言（武谷水城）婚禮式（有住齋）家內衞生（三笠の舍主人）

學園
百人一首講義（井口隆太郎）

漫錄
楢の舍歌がたり（富田馬太）林迷齋女訓（君山居士）庭の訓（菅の舍主行）日枝祭（井上賴文）京太郎物語（藤井人曆）四三條實條公後室の消息（楢の舍主人）月の異名證歌（遠山操）小說寒紅梅（中村花瘦）

文林
歌文數十首

雜報
行啓●我が國の女子●厠の中のよき●露をたに

餘芳
みくるまのあさ

敎の庭
歌文數十首

口諦
小楠公の母（松本楓湖）

東洋の君子國麗秀端正なる女敎自然に存す之を涵養し之を發揮し以て貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめんこと是れ女鑑の務むる所なり故に女鑑は世好と時流との表に卓立し誠意本旨の貫徹せんことを期す

發行所　東京麴町區平川町五丁目十六番地　國光社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふ事に心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬ、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進歩目覺しきことなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學することも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、每月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歴史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學(衛生、育兒、看病と合す)裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田伸子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の敎員諸君に委頼し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢(無郵税)、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後每月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麹町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

林學士 星野愼之輔君著

昆蟲 植物 金石 採集法

目錄

昆虫分類　昆虫變態　採集地　採集注意　採集器　貯蟲器　刺針法　昆蟲運搬法　幼蟲類飼養法　葉とは何

花とは何　枝とは何　植物名　及樹木種名　採集すへき部分　採集氣節　採集器具　乾腊法　標本製法　金石分類名稱

金石の現出　識別鑑定法　岩石分類名稱　土性分析法　採集器具　採集方法　地質觀測法及び器具

小形洋綴美本　正價金八錢　郵税金二錢

木の間青み繁く蝶は野邊に舞ふ今や採集の期となりぬ請ふ一本を坐右に備へ給へよ。

第四版

百人一首講義

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

正價金廿八錢　郵税四錢

發兌元　東京麹町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

本月五日ヨリ八日マデ四日間每回午後七時半ヨリ本郷東竹町會堂ニ於テ傍聽無料

エール大學哲學敎授

ラッド氏宗敎哲學 英語講演

發起人　原田助　成川義太郎　横井時雄　木村駿吉

元祖 實効確證 色を白くする三能しやぼん

一個金十錢　三個箱入金卅錢

●抑も此三能しやぼんと云へるは理化學的醫學的を應用したるものにて第一身躰の色を白くし御顔等の艶を出し第二には肌のしみ又はにきび、そばかすをとり。御肌合を艶美ならしむること奇妙なり又た第三種々の傳染病の毒を消すべき大効あり故に名づけて三能しやぼんと云ふ常に御用ひなされ候へば色を白くすると雪をも欺むく計りにして性來色黒き肌又は何となく色悪しき肌の御方始め自然に出來たる肌のしみ腫物の跡に至る迄御用ひなさるうち知らずしらず消て艶美なる御肌になること疑なし殊に諸傳染病の看病人などは常に之を用ひ身躰を洗ひなば其感染を防ぐと勿論なり御試用の上眞に三能しやぼんの名に背かざるを知賜へかし

近來三能石鹸同様の効能を附し名稱のみ廣大にして無効能なる尋常の粗悪石鹸を不相應の高價を以て單に代價の不廉なるより上等石鹸ならんとの念を生ぜしめ世人を瞞着せんとする奸商續々沸出候得共此等は到底効能拔群なる三能石鹸と雲泥の違ひあるは一度御試用の上は眞に明瞭なれば斯る瞞着手段に陷り貴重の金錢を贅費せられず不相變御愛求被成下併而希上候

●玉掌露

一名玉のはだ　一瓶金六錢　大瓶金十錢

抑この玉掌露は玉の如く透明にして中に香氣を含み皮膚を潤し艶を生ずる効能ある故に人々當に此露を手掌にたらし面部其外にぬりつくれば○のぼせるとなし○はだあれず○日にやけるとなし○きめこまやかになり白粉のなじみよく○にきび○そばかす○あせも○づそう其の外總て悪きふきでものせず○しみを生ずるとなく又寒氣風あらき時は此露を常より多く用ふれば水つかひするとも○ひゞきれず○しもやけせず四季ともに皮膚の美艶をたもつと誠に無類の佳品にして實に掌中の寶玉と云ふべし殊に三能しやぼんを御遣の跡にて御用なれば尤も効能多し

○髪のこやし毛のはへる香油（一名ふけおとらす）美人かつら　一瓶金拾錢

○日本第一おしろいいらず白妙　一瓶金拾錢

つやふきん　美人かつら

發賣元　東京銀座一丁目

本舖　電話番號四百七十二

佐々木玄兵衛

開店廣告

横濱福音舍

基督教書籍
卸し小賣共
新聞雑誌類
廣告の取次
西洋齒磨散
卸し小賣共

地藏阪中央千五百廿五番地は各社出版もの一切細羅し出版元と同様の割合を以て基督教に關する分は取次升基督新聞福音新報大合雑誌前神製にして皆様御存の分端書にて御注文被下ば屆升

商標新造廣告

登録商標

西洋はみかき粉

袋入 二錢ヨリ
箱入 三錢四錢十錢
瓶入 七錢ヨリ

大阪市内ははがきにて御注文の節現品御送附の上はがき代返上府外は最初見本品に限り遞送無料

俗に前神はみかきといふ弊堂の西洋齒磨粉はドクトル、フラソシス氏の法に從ひ船來純眞の原料にて製し香氣も馥郁たるにぞ多年愛顧の内外諸彦より一度用ふれば復た他品を用ふる能はずとまでに賞讃せられ曾て大阪に在りしコールベー女史第三高等中學校敎師元齒科專門醫たりしギユリキ氏の如きは殊に賞讃措能ず殊更保證書を寄せ世に試用を勸めらるゝ由然るに近來擬製の品出でんとすと聞ゆれば新に商標を定めて農商務省の登録濟みたり愛顧諸彦右の商標ゼー、エム印を認めて眞品を知られよ尤も當分は新舊兩樣のレツテルを用ふ

前神彰榮堂

大阪高麗橋通心齋橋筋南

東京市賣捌所本郷四丁目三角堂、芝櫻川町十番地吉田、赤坂溜地町十八番地十愛社雑貨店、芝三田二丁目三番地岸田、麴町下六番町女學社内御小賣所新橋出雲町一番地南朝堂、横濱北藏阪中央福音舍○其日々行商人アリはがきニテ御注文ヲ乞フ

古川道人著

眞理易知

一名しらぬが佛

定價拾五錢
郵稅四錢
六月十七日發賣

著者の自序に曰く

スヰデンボルクの言葉に「神は一番エライ人間だ」と云ことが御座いますが若し神が人間と同じ性質を具へ人間と同じ愛心を持たれ、しかも人間よりはずつとエラク人間の愛心の極、清き尊き義しき心の極で御座いますならば人間は有限の神と申すことの出來る程貴重なるものです。しかし人間は神の子であつても其智慧に於て限りある以上は人間の知らないことがたくさんあるに相違御座りませんレツシングは其詩に「若し神が左の手に眞理を持ち右の手に眞理を研究するの能力を持ちどちらをやらうかと曰はるゝ時には眞理は固より神の者であるから之を神に歸し眞理を研究するの能力を神よりもらひたい」と申しましたが世の中の事は天の事より地の事人の事に至る迄能くわからない所に味があります。滿つればかくる世の習。滿たない時こそ滿ちる樂みがあります。開けた今日は浦島太郎の時と時代が違ひまして「明けて嬉しき玉手箱」かも知れませんが多くはパウロの言葉の樣に「既に望を見ばまた望なし」で御座いますから知らぬが佛も一つの眞理だらうと思ひます云々大方の諸君御講讀を乞ふ

發兌所 東京市新橋出雲町一番地 警醒社書店
賣捌所 仝 麴町區六番町六番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生

廿五號

一冊價四錢　郵稅五厘

社説には東坡人と吟ずより筆を起して嘔吐的青年に至て、烈々慷慨の憤氣極まるを甚し「吾が園」には八丈島探見に係る最も珍らしき爲朝の古跡と八丈島婦人とのを掲げ、「漫筆」には閑寂にして世味深き終焉の辭と、最も情迫り感湧きて一種嚴肅の涙深き亡母と想ふの麗筆を掲げ、「理科の話」には當季最も研究すべき梅雨の話あり、「文欄」には高等女學生の手に成れる各女學校の文を集め、「博物の園」には某學士の手に成れる面白き奇なる蜘蛛の說明と化物花の實際的の作り話しあり「時の感」には花圃、若松、小金井三女史の簡潔にして穿てる短評と女子教育、會堂の感を掲げ、「昔話」には惟然坊みな俳諧、一年の雨等最も愉快なる突談を掲げぬ、此他「詩歌の巻」には古人秀絶の名歌秀句を一種の眼光にて想深きものを集錄して「學びの栞」には唐詩選講義を掲げたり

大部大臣子爵榎本武揚公題字
文學院醫學士三島通良先生著

增補訂正　第二版

皇后宮御觀

はゝのつとめ

親の巻　妊婦産婦の心得　定價金三十錢（郵稅二錢）
子の巻　日本育兒法　定價金四十五錢（郵稅四錢）

右は我國無双との好評を博したる日本母子衛生書なり先般增補訂正の上再版したり醫科大學産科婦人科小兒科病室幷に群馬縣高等小學其他諸女學校に於て參考書又は用書として使用するところ少からず

書肆　通三丁目 丸善。表神保町 中西屋。馬喰町 島利。春木町 島利支店。通鹽町 中央堂、

牧畜雜誌

第八十二號目次　六月十日發刊
毎月十日廿五日二回發行

○論說
○我邦牧畜業の前途如何　獸醫學士　佐藤淸明
○耕牧の關係に就て　獸醫學士　池田晋次郎

○雜錄
○リンコルン種羊の圖解○仔豚の手飼○種豕の色澤優劣○乳汁の防腐簡便法○雄鷄に配する雌鷄の數○孵卵器は特に夏季に効あり○魯布病の治法○鴿の孵卵及其雛○牧羊實驗談○生牛皮輸入增減比較○宮崎縣の屠獸數○軍馬購買○舊藩々の牛馬政（承前）○岩手縣獸醫學校景況一斑○家畜品評會開設の計畫○馬匹賣捌所

○統計
○畜產物數量及價格

○講話
○暹羅鷄飼養小言（承前）　東京　大賀宗祿稿
○牧羊の栞（承前）　山陰牧翁稿

○寄書
○屠畜法　加納正治
○南洋の嶋廻（其二）　藤井米八郎

○問答
○孵化用卵に就き質問の答○牛舍の件に付質問の答○乳牛の件に付質問

○廣告

發行所　東京日本橋區呉服町三十二番地　牧畜雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

看護婦生徒募集廣告

來ル九月看護婦生徒募集候ニ付志望ノモノハ規則並申込手續等病院ニ就キテ承合セノ上七月十五日迄ニ南豐島郡下澁谷村本社病院エ申込ムヘシ但シ年齢二十歳以上三十歳以下身幹四尺六寸以上ニシテ健康獨身ノモノニ限ル

廿五年六月

日本赤十字社

巖本善治君編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ

定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとゝす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躰操……百

上躰操……百
下女體……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版

教育學、女學の附錄廣告

小生が、明治女學校高等科女生に口授したる講義の中、左の二書に錄したるものは、些さか大方の是正を請度ものあり、且つ地方に在る女生にして其の筆記を見たしと要むるものもあれば、曩に簡易出版を用ひ、第一號を出版せし所印刷不熟練のため殊の外不鮮明に有之、依て本號より左の法により附錄として出版致すべし。

巖本善治

教育學 ○講義錄

毎月第二甲の卷女學雜誌へ六號詰四頁の附錄として出版す、憾らくは世上の意見を異にする君子の是評を請むとす

女學

毎月第二乙の卷女學雜誌へ六號詰四頁の附錄とす、是れ年來一科の學を講するの必要を感じ一二の痛駁あるに拘らず尙之を講述す

第四回夏期學校

開校時日　七月十六日ヨリ十二日　間箱根驛ニ於テ

校費　金三拾錢

滯在費　一日　金拾七錢

入校申込　東京英和學校內　田中儀三郎宛

日本鐵道會社、日本郵船會社、兩毛鐵道會社（照會中）割引切符ヲ要スル諸君ハ學校又ハ教會ノ證明書ニ郵稅二錢ヲ添ヘテ田中儀三郎宛申込アルベシ

寄附金ハ福音新報社、警醒社、護教社又は東京明治學院內小倉修吉宛御送附ヲ乞フ

定期出版豫告

● 女學生第廿五號は豫定の通去月廿一日出版せり。

● 通信女學講義錄第六號は去月廿五日出版せり。

● 教育講義は女學雜誌甲の卷第三百二十一號の附錄として去月十八日出版せり。

● 女學講義は乙の卷第三百二十一號の附錄として去月廿五日出版せり。

女學雜誌大取次所

- 東京市本町三丁目　瑞穗屋卯三郎
- 同錦町二丁目　武藏屋藤藏
- 同尾張町二丁目　東海堂
- 同彌左衛門町　嚴々堂
- 同表神保町　東京堂
- 同出雲町　警醒社
- 同鐵砲町　指金堂
- 同元富士町　盛春堂
- 同雉子町　團々社
- 福岡縣福岡　積善館支店
- 神奈川縣橫濱市　共同新聞發賣會社
- 同　万字堂
- 京都佛光寺烏丸　東枝律書店
- 同新町竹屋町　便利堂
- 大坂本町四丁目　岡島支店
- 同　福音社
- 神戸元町四丁目　福音社
- 函館市　福音社
- 熊本縣熊本　草野門平
- 京都新町二條　大黒屋書店

女學雜誌市內賣捌店

- 麴町區上六番町　日盛堂
- 同三番町　梅仙舍
- 同　福音屋
- 同飯田町　三文字堂
- 同　洗心堂
- 神田區神保町　松江堂
- 同　青柳堂
- 同雉子町　大塚書店
- 牛込區神樂町　積善堂
- 同　正導舍
- 同肴町　深田彌兵衛
- 本鄕區弓町　文字堂
- 同　就本堂
- 同富士前町　解明堂
- 同　盛春堂
- 同二丁目　古河屋
- 下谷區東黑門町　三一堂
- 神田區松岡町　山口次郎
- 同旅籠町一丁目　橫本
- 同鍋町　清水嘉兵衛
- 日本橋區本町三丁目　庭花堂
- 芝區南佐久間町　鈴木新兵衛
- 同櫻田本鄕町　栗原
- 同同　鈴木
- 赤坂區新町　赤川市兵衛
- 同同　飯田
- 京橋區尾張町　鈴々木
- 同出雲町　金盛堂
- 同　山田屋
- 本鄕區天神町　改進堂
- 神田區小川町　大塚雜誌店
- 同錦町二丁目　耳故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も亦改正致度候間舊號迄の爲替は

麴町郵便局へ御振込被成下度候

雜誌代金至急御拂込相成度候。

女學雜誌社發送部

一　新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割増の事

一　雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵稅	金五厘	

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部増と定む。

發行所

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY